

地方小出版

情報誌

アクセス

毎月1回	1日発行
購読料	定価 150円
	(本体 139円)
	年間 1,500円 (税込み)
振替	00120-0-19017

発行所 (株)地方・小出版流通センター
編集 アクセス編集委員会

〒162-0836 東京都新宿区南町 20
TEL.03-3260-0355 FAX.03-3235-6182

「反原発」本 出版続く 権力に牙むく高知の人たち 「闘いは燎原の火」

文/足羽潔=元・高知新聞記者、現・高知新聞総合印刷取締役支配人



高知県内の元教員グループが制作を続けている「ピキニ水爆実験」
被ばく紙芝居の惨状を伝える紙芝居絵画 (森本忠彦絵)

「3・11」からもう8年。あの惨劇のシーンを思い起こすとき、私たちは何をしてきたのか、何をしていくべきかの問いかけが自分自身の中に渦巻く。

元首相・小泉純一郎が「原発推進」から「原発ゼロ」の主張に態度を切り替えて以来、「原発ゼロ」の声は一気に日本中を席卷するのかの期待感もあったが、自民党を支える保守層の厚さの前に、行く手を阻まれている。しかし、少なくとも高知県では「反原発の闘いの炎を消してはならない」との叫びが消えない。ここ数年でも「反原発」を訴える書籍の出版が続いているのだ。

「書籍」はいずれも自費出版で▼島岡幹夫著「生きる」(2014年)▼脱原発を考える四万十・高知会議編「フクシマそしてクボカワ」(2014年)▼太平洋核被災支援センター編「ピキニ核被災ノート」(2017年)▼岡村啓佐写真・著「NONUKES〜ピキニの海は忘れない」(2018年)

原発を止めた男

「3・11」直後から、「原発を止めた男」として「かがり火」や「東京新聞」など多くのメディアに取り上げられたのが高知県窪川町(現・四万十町)の島岡幹夫だ。昭和40年代から50年代にかけての原発誘致のうねりの中で、高知県でも窪川町海岸部に誘致計画が進められ、窪川町では血を血で洗うような10年戦争が演じられた。その闘いの反対派のリーダーとして生き抜いたのが島岡。島岡は反原発の対立軸に「農業」を置き、たとえば無農薬農業に私たちが生きるすべを実践しながら、座標軸を示した。

「反原発を唱えるオレたちが左手に農業を持つのか」と語る島岡の「哲学」に魅せられた人々は数多い。現在、農業雑誌の編集記者をする30歳の女性、柳島かなたもその一人。島岡語録を座右の銘にして取材を続ける。かなたがよく口にする島岡語録がある。島岡たちが玄海原発視察に出かけたとき

の話だ。

旅路、島岡は美しくも素晴らしい一面まっきっきの大豆畑を見つけ、叫んだ。「バスを停めろ」。以来、大豆生産を減反作物として農業の主役に取り込んだ。その大豆は妻の和子たちの手で、豆腐、納豆に姿を変えた。今風に言えば6次産業化のスタートでもあった。

窪川の反原発闘争は国と地方の政治闘争でもあった。四万十川沿いに窪川と愛媛県宇和島市を結ぶ予土線(伊予と土佐)は過疎鉄道ゆえの廃止論議が浮上していた。原発推進派のリーダー藤戸進町長の解職騒動阻止に高知入りした自民党幹事長の桜内義雄は「窪川原発をすすめてくれたら予土線を残す」とささ言い切った。(町長の解職は成立も出直し町長選挙で藤戸進は再び当選)

島岡と共に戦う仲間たちはこんなプラカードをつくって桜内の眼前に差し出した。庭師の格言「桜切るばか、梅切らぬばか」をもじった「桜見るばか、藤切らぬばか」。桜内は激怒した。

後に、高知新聞東京支社勤務で自民党を訪れた高知新聞記者の鍋島康夫は「高知はゼニがいないのかと随分、皮肉られた」と述懐する。

島岡の記した「生きる」は10年戦争とも言われる窪川の反原発闘争のすべてがわかる一冊でもある。

「生きる」を補完するものとしては明治学院大学の猪瀬浩平の記した「むらと原発〜国策をはね返した知恵に学ぶ」(農文協、2014年)も、島岡と窪川の闘い模様をテーマにしている。

3・11当時、四万十川河口の文教の町、土佐の京都と形容される四万十市(旧中村市)の市長だった田中全は「脱原発をめざす高知県首長会議」を立ち上げ、シンポジウム「フクシマそしてクボカワ」を開催、その概略をまとめたブックレットを出版した。

シンポジウムには元・東海村村長の村上達也を招き、その講演「原発事故からみえたこの国のかたち」も収録した。原発関連用語解説もきちんと行い、薄くてもハイレベルな一冊だ。

ビキニ水爆実験への挑戦、紙芝居も

「ビキニ水爆実験」の実相は戦後史の深い闇に葬り去られていた。「ビキニ水爆実験」の被災者の地獄の苦しみを拾い集め、公にしたのは高知県の高校生サークル・幡多ゼミナール。その記録をベースに太平洋核被災支援センターは「ビキニ核被災ノート～隠された60年の真実を追う」と題した証言集を出版した。同時に被災者への国家賠償訴訟に踏み切った。

訴訟は2018年7月の高知地裁判決で敗訴になったが、被災者の救済義務が行政にあることを明確にした。現在、高松高裁で審理中。

こうした動きを踏まえ、太平洋核被災救援センターのリーダーの1人である岡村啓佐は証言集を補完して、なお、被災者、あるいは残された遺族の苦悩と怒りを写真で表現した「NONUKES～ビキニの海はわすれない」



『NO NUKES ビキニの海は忘れられない』岡村啓佐著／本体2,000円 販売＝高知新聞総合印刷 ISBN9784906910809

を出版した。札幌市のデザイナー、江畑菜恵が用いて仕上げたダブルトーンの写りが重厚さを増す。

「NONUKES」は証言をすべて英訳した。「ビキニ水爆」の実相を世界へ発信したいという思いからだ。大学生や大学研究者、マスコミ関係者らが英訳にボランティア参加した。

吉永小百合の「世界中の人たちに見て頂きたい作品です。核兵器の廃絶を実現させるためにも」の帯文や発刊に寄せた激例文も I C A N 国際運営委員・川崎哲や高知県知事・尾崎正直の激励と共に支援の広がりを示す。

運動を受けて、高知県は2019年度予算にビキニ環礁水爆実験被災者救済に関する事業として救済・調査研究・伝承を目的とした270万円を計上した。画期的でもある、

加えて、驚くことに「NONUKES」は、大きなバトンになっていく。高知県内の元教員らがこのビキニ水爆実験を紙芝居で子どもたちに伝えようと、制作を始めたのだ。

3月末までに絵画もできあがり、完成間近。絵を描いたのは高知県展理事長でもある森本忠彦。ここにもスクラムの大きさがうかがえる。森本は言う。

「子どもたちに伝えるべきものが何か。それをきちんと正しく伝えることが私たちの仕事だ」

反骨の地

まもなく人口が70万人を割る高知県で続く反原発の叫びはなにゆえなのか。反窪川原発闘争には地元紙の記者としてかわり、最初に紹介した書籍をすべて編集してきた者として、高知県民に熱く息づく反権力の魂を誇らな

いわけにはいかない。

反原発の叫びは出版にとどまらない。「3・11を忘れない！こうちアクション」のデモ行進は絶えることなく続いている。参加者の思想原理は間違いなく「脱原発・反原発・原発ゼロ」であり、「台地を愛して共に生きていこう」という島岡の思想と座標軸に共鳴してきたからにはほかならない。

高知県は政治学的に非常に面白い土地柄を持つ。衆議院選挙では5議席の中選挙区時代、自民2、野党3の結果を生み、野党の中には共産党の議席もあった。さらに、小選挙区に突入後も3選挙区中1つを共産が奪取したこともある。全国の県庁所在都市で最長の40年以上にわたる「革新市政」を継続していたのは高知市だ。その革新市政を支えた思想原理は「市民の心を心とする政治」であり、政策的には「人々が心一つにできる反戦・平和・反原発を守り抜くこと」(元・高知県総評議長、国澤秀雄)だった。

1984年、高知県議会で原発推進決議がなされたとき、当時、社会党高知県本部委員長だった栗生茂也は「高知県の反原発の炎は燎原の火のごとく高南台地(窪川)を包む」と反対討論で叫び、傍聴席の人々の心を振るわせた。

それからすでに35年。高知の反原発の炎は決して絶えない。(文中敬称略)

(あしわ きよし＝元・高知新聞記者、現・高知新聞総合印刷取締役支配人)

*

※書籍に関する問い合わせは足羽(あしわ)まで。090-6281-0416

新刊ダイジェスト

※価格は税込(消費税率8%)表示です。